

東京地学協会第4回海外巡検「イタリアの火山噴火と遺跡」報告

Volcanic Eruptions and Archeological Sites in Italy —The Society's Fourth Overseas Field Trip—

井 上 明*

イタリアは、火山に興味を持つ者にとってはいちどは訪れてみたい場所のひとつである。ヨーロッパ最大の活火山であるエトナ山、地中海の灯台ストロンボリ島、ポンペイを滅ぼしたベスビオ火山など有名な火山が多い。そして今回(2001年6月8日～15日)、私たちはこれら三つの火山に実際に登って見学・観察をすることができた。私たちは、参加者13人と指導者の早川先生・静鉄観光の益田さんである。

ミラノから国内線に乗り継いでまずシチリア島のカタニーヤに向かった。カタニーヤはエトナから流れ下ってきた溶岩によって大きな被害を受けたことのある町である。

エトナは3315m、富士山を思わせる山である。私たちはバスで八合目くらいまで登り、そこで4輪駆動の車に乗り換え、最後は歩いて山頂をめざした(写真1)。エトナは常時噴火をしており、この時も大きな噴火が危惧されている状態であった。山頂付近はロープが張ってあって立ち入り禁止となっていた。噴火は私たちが登ったのとは反対側で起きており、山頂越しに噴煙が上がるのが見えた(口絵1-4)。私たちはそこで過去の溶岩噴出のいくつかのパターンを観察した(写真2)。エトナは私たちの訪問の一ヵ月後(7月)に大きな噴火を起こし、私たちが歩いて登ったあたりは溶岩流が流れ下った。軍が出動して溶岩流の方向を変えるための「土手」を作ったという報道もあった。エトナは火山の災害をどう防ぎながら火山と共生していくかについてのいろいろな情報と経験を示しており、火山と暮らすことの多い日本人として

は学ぶことが多いように思う。

エトナから下ってギリシャ時代の遺跡タオルミーナを見学する。海から200mほどの高台に位置しており、その地形から早川先生は「これは海岸段丘のようだ、ここで海岸段丘を見られるとはねえ」とおっしゃる。イタリア本土のシチリア島対岸部分には1000mの高さの海岸段丘があると



写真1 エトナ。ここまで登山バスで行ける。



写真2 エトナ山頂展望台に掲げられた噴火口の説明。

* 敬和学園高等学校図書館司書，新潟市太夫浜325

いう論文の紹介もあって、いろいろな地形への興味もわいてくる。

三日目の昼頃船に乗り、リパリ諸島のいくつかの島を経由してストロンボリ島に向かう。この日は数時間を船に揺られ、その夕方から真夜中にかけてストロンボリ登山をする、ハードな一日となった。

ストロンボリは海底火山の先端が900 mほど海の上に突き出た円錐形の火山島である(口絵 1-3)。そしてローマ時代よりも古くから現在にいたるまで噴火が続いており、地中海の灯台と呼び習わされてきた。またその噴火の様子はストロンボリ式噴火と名づけられている。

このストロンボリへの登山は今回の巡検のいわばハイライトでもあり、印象深いものとなった。島は道が狭く、昔のミゼットのような三輪自動車しかないので、私たちはまさしく海拔0 mから山頂(924 m)近くの展望場所までを歩いて登ることになったのである。

ストロンボリの火口は三つある(と、私たちに

は見た)。それらはマグマをためては間欠泉のようにときどき真っ赤な火柱を噴き上げる。この火口はイタリア語で「火走り」と名づけられた崩壊谷の上部にあるが、うまいことにこの崩壊谷を取り囲む崖から見下ろす形で噴火の様子を比較的安全に見ることができるのである。特に夜になると赤い火柱が美しい。従って登山も涼しくなる夕方から登り始めて、夜、火口を取り囲む崖で噴火を見するというのが一般的な方法であり、私たちもそのように登ったのである(写真3, 4)。噴火観察のもう一つの方法は夜の海の上に船を浮かべてそこから見るというもので、実際、噴火が始まるとそれらの船でフラッシュがパッパッとたかれるのがわかる。

私たちは崖上に陣を占めて噴火を観察した。なんと、地面に腰をおろすと地面があたたかいのであった。

三つの火口はそれぞれ一回あたり数秒の噴火と10分～20分のインターバルで間欠泉のように火柱を上げる。大きく高い噴火をするものはインターバルが長いようである(写真5, 口絵 1-1)。

重い三脚を担いできたみなさんは火柱が上がるたびに「すごい」「すごい」と言いながら写真を撮っていた。添乗員の益田さんが静鉄観光のホームページに動画スタイルで写真を出しているのをご覧いただくと噴火の様子がおわかりになると思う。



写真 3 ストロンボリ登山。



写真 4 22 時、ストロンボリ山頂に到着。



写真 5 ストロンボリの噴火。

ところが、フィルム交換中に噴火が始まり火山灰がカメラの中に入って大変なことになった人もいた。それほどではない人でもカメラには大なり小なり火山灰の被害はあったようだ。火山の撮影については注意を払う必要がある。

下山は真夜中となった。現地ガイドに従って登りとは違った道を下る。いわゆる砂走り状態の斜面を走り下りたようなもので、膝がガクガクしたことであった。

欧米の人はこういう島にのんびりとバカンスに来るようであり、泳いだり日光浴をしたりしながら、登山もするのである。このことはいろいろ考えさせられることを含んでいる。ひとつは、スケジュールに余裕がほしいということである。私たちは船酔い気味で島に到着し、少々の休憩をはさんですぐ登山をするスケジュールであり、大変

だった。別の問題としては自然に親しむ「海外旅行」を楽しむようになりたいということである。私たちがいた三日間にイタリア人やドイツ人・アメリカ人などいくつかのグループが登るのを見た。それらは若い人のグループから結構熟年と思われるグループまでいろいろあった。みなさんそれぞれに元気がありこういう旅行を楽しんでいる様子であった。一方、日本人のグループがストロンボリ島で登山するのは今までほとんど例がないようで、私たちが二つ目か三つ目のグループではないかと現地の案内人が言っていた。のんびりとイタリアの自然を楽しみながら火山にも登って自然観察をする、そういう「海外旅行」をするようになりたいものである。



写真 6 レストランで出たストロンボリピザ。フォークで刺すと噴煙がでる。



写真 7 古代と現在、二つのエルコラーノ。遠くにベスピオ火山。



写真 8 エルコラーノを埋めた火砕流堆積物。



写真 9 ポンペイ遺跡。



写真 10 特別許可を得れば、ベスピオの山頂火口を一周できる。



写真 11 ベスピオ山頂で。

私たちも登山の翌日はさすがに休養日として、ゆっくり島内を散策したり食事とワインを楽しんだり海で泳いだりした(写真6)。島の家はエーゲ海のような白いしっくいの家であるが、そこに葦ですだれを作って日よけにしているのが日本と同じで面白かった。クロツグミによく似たメルローがきれいな声で鳴いていた。

五日目に船でナポリへ移動。バスでエルコラーノ遺跡(写真7,8)とポンペイ遺跡(写真9)をめぐる。どちらもベスピオの火山噴出物によって埋もれて忘れられた町である。ベスピオを遠景にポンペイで記念写真というのはよくあるパターンであるが、実際にベスピオに登山する日本人は少ないと思われる。これも残念なことだ。そしてポンペイで溶岩や火砕流の流れ状況を示す地図を広げたりするのは私たちくらいのものである(口絵1-6)。陽のあるあいだは目いっぱい勉強してホテルに着いたのは8時過ぎであった。いやはや。

六日目はベスピオに登った。

ベスピオへはバスで九合目くらいまで行くことができる。そのあたりまで登ると外輪山のソンマを内側から、下方に見ることになる。

駐車場から上の登山道はスコリアでじゃりじゃりした道であるが、幅は広く、登りやすい道である。普通の格好の観光客がひっきりなしに登ってきている。頂上にたどり着くとナポリ湾やソレントが見えて雄大な景色である。

火口は大きく深い。1944年の噴火のときには溶岩湖が口のところまでタブタブしていたそうであるが、マグマが下がって今は深い大きな穴になっている(口絵1-5)。

私たちは現地の山岳ガイドを特別に雇い山頂火口丘を一周した。普通の観光客は整備された道を歩いて火口を四分の一くらい巡ったところから戻るのである。私たちは一時間弱を歩き、残留ガスを確認したり、火口の壁をいくらか降りてマグマのせり上がった跡などを観察した(写真10,11)。

早川先生によると、ベスピオは浅間山に似ているとのことであった。

午後はナポリの国立考古学博物館を見学した。

今回の巡検は少人数であったのでそれぞれが十分に巡検したという気持ちを強く持てたのではないだろうか。皆さんとても熱心で、それぞれの持っている知識や疑問・感動を率直に出し合ってよく勉強した。

困難なこともあった。それはストロンボリの登山が大変で、途中で動けなくなってしまい、これは引き返さなければならないかと思われた場面があったことである。ところが、ごごごと地鳴りがして山の上に火柱が上がりと、みんなはパッと起き上がり、その噴火を見て感動し、そして元気を取り戻してまた登り始めたのであった。「噴火が始まると急に元気になる、このグループは本当に不思議な人たちなんだなあ」と現地案内の江副さんが言っていたが、たしかに不思議な、しかし楽しい熱心なグループのイタリア火山巡検であった。

(写真：荒川和子-5, 春名博章-2, 6, 8, 9, 10, 益田 豊-1, 3, 4, 早川由紀夫-7, 11)